

中国社会文化学会 2015年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel:03-5841-3746, Fax:03-5841-3744, E-mail:shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（シンポジウム資料代）1,000円 非会員の来聴歓迎

2015年7月11日（土）自由論題報告

第一会場 1番大教室 13:30~16:40

司会：伊東 貴之（国際日本文化研究センター）

宋代における開封批判の論理山本 健太郎（東京大学大学院生）

コメンテーター：妹尾 達彦（中央大学）

歴史への自己投影をめぐって——李贄人物論再考阿部 亘（早稲田大学）

コメンテーター：林 文孝（立教大学）

「一飲一啄 莫非前定」考笠見 弥生（東京大学大学院生）

コメンテーター：福満 正博（明治大学）

第二会場 2番大教室 14:35~16:40

司会：吉澤 誠一郎（東京大学）

忘れられた西洋人顧問：ハリデー・マカートニーと清末中国の駐英清国公使館

.....Thomas Barrett（東京大学大学院生）

コメンテーター：青山 治世（亜細亜大学）

牟宗三の「道徳的理想主義」における「道徳」張 煒（東京大学大学院生）

コメンテーター：中島 隆博（東京大学）

会員総会 17:00~17:30 1番大教室

2015年7月12日（日）

シンポジウム 東アジアの港市と海商

1番大教室 10:00~17:00

第一部：東シナ海の海商 10:00~12:15

徽州商人と倭寇——嘉靖後期の東アジア海域秩序の劇震を中心に——熊 遠報（早稲田大学）

戦国大名と海の交易者たち黒嶋 敏（東京大学）

コメンテーター：小島 毅（東京大学）

懇親昼食会 12:15~13:30（2番大教室） [会費1,000円]

第二部：南シナ海の港市と移民 13:30~17:00

1760-1840年代におけるマレー海域の貿易と移民太田 淳（広島大学）

交易と現地社会の再編——スルー王国における民族階層の構築青山 和佳（東京大学）

コメンテーター：村上 衛（京都大学）

総合司会：平野 聡（東京大学）

総括討論

◆自由論題報告 第一会場 7月11日(土) 13:30~16:40 1番大教室

◇ 宋代における開封批判の論理

山本 健太郎

〔報告要旨〕宋王朝の国都は開封である。靖康の変によって宋王室が南渡し、紆余曲折を経て臨安が「行在」とされてからも、「本来の」或いは「理念上の」国都であり続けたとされる。ただ、宋人は国都としての開封に常に肯定的な評価のみを与えてきたわけではなかった。伝統中国の国都は周の洛邑のようにその中心性が重視されることもあれば、漢・唐の長安のように山河に囲まれて堅固であるという要害性が評価されることもある。そして、宋の開封は王朝創業以来その要害性の不足が問題視されることがあった。本報告では、「徳」と「險」についての議論や国都の比較論の分析を通して、宋人による開封批判の論理がどのように形成されるようになったのかについて思想的に明らかにすることを試みる。

〔報告者紹介〕山本健太郎（やまもと・けんたろう）、1986年生。専攻は宋明思想史。上智大学文学部卒。現在、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。

◇ 歴史への自己投影をめぐって——李贄人物論再考

阿部 亘

〔報告要旨〕明末の思想家、李贄（李卓吾、1527~1602）はその著述「五死篇」（『焚書』巻四）において、好き死を遂げた歴史上の人物を挙げ、想像の中の自らの死と重ねあわせている。この篇で挙げられた人物は彼の史論の集大成ともいべき『蔵書』において「直節名臣」に分類された人々とかなりの部分で共通している。だが、李贄自身、この「直節名臣」を「智謀名臣」よりも必ずしも評価していないのである。

李贄は「経」と「史」を一体のものにとらえ、「史」のうちに「鑑戒」を求め、歴史における「是非」を大いに論じた。では、歴史上の人物を通して把握された、彼自身の自己像は如何なるものだったのか。彼は人々の生の様態を如何に捉え、自らをどう位置づけたのか。本発表では彼がしばしば語る「時」等のキーワードを踏まえつつ、彼の歴史への自己投影の様相を読み解くこととしたい。

〔報告者紹介〕阿部亘（あべ・わたる）、1982年生。専攻は明代思想。早稲田大学大学院博士課程単位取得退学、現在早稲田大学理工学術院非常勤講師。主要論文に「李贄の師弟観」（『東洋の思想と宗教』30、2013年）、「李贄の死生観——死へのおそれから死の選択へ」（『日本中国学会』65、2013年）などがある。

◇ 「一飲一啄、莫非前定」考

笠見 弥生

〔報告要旨〕通常「一飲一啄、莫非前定」とは、飲み食いのような些細なことまで予め運命で定まっている、という所謂天命思想を表すことわざで、『莊子』「養生主」に出典を持つとされる。しかし出典である『莊子』では「十歩一啄、百歩一飲」と雉の生活を表現したもので、天命思想とは直接の関係をもたず、形式も異なっていた。「一飲一啄、莫非前定」という形式で広く用例が見られるのは、主に明代の作品で、特に「三言」、「二拍」、「西遊記」等白話小説に複数用例が見られる。また、「六十種曲」等には「一斟一酌、莫非前定」、「事豈偶然、莫非前定」といった表現があり、いくつかのバリエーションがあったこと、またことわざとして確立したのは明代、或いはそれに近い時代だったのではないかと推測できる。そこで本報告では、それらの用例を詳細に検討し、このことわざの表す意味と成立の過程を探ると同時に、このことわざの背景となった思想についても検討する。

〔報告者紹介〕 笠見弥生（かさみ・やよい）、1986年生。専攻は明清文学。東京外国語大学外国語学部卒。現在東京大学大学院人文社会系研究科博士課程在学。主要論文「三言」「二拍」における僧尼と道士（『中国俗文学研究』22、2013年）。

◆自由論題報告 第二会場 7月11日（土）14：35～16：40 2番教室

◇ 忘れられた西洋人顧問：ハリデー・マカートニーと清末中国の駐英清国公使館

Thomas Barrett

〔報告要旨〕 清朝の近代化過程や西洋認識形成に貢献した西洋人顧問の実像は概ね明瞭となっているものの、充分認識されてこなかった人物は今尚少なくない。1793年に乾隆帝に謁見したジョージ・マカートニーの一族である、サミュエル・ハリデー・マカートニー卿（Sir Samuel Halliday Macartney、中国名は馬格里、字は清臣。1833-1906）はその代表的な一人である。常勝軍で副司令官を務めた後、李鴻章に南京製造局の最高責任者に任命され、そこで十年間にわたって務め続けた。その後、郭嵩燾らとともに渡英し、ロンドンの清国駐英公使館で参贊を30年間務めた。本報告では、以下の内容について紹介する。まず、清国の駐英公使館におけるマカートニーの日常的な任務について分析する。次に、彼の思想上・外交上の貢献と影響について検討する。そして、英国の新聞メディアを通して清国の公的イメージを如何にして管理しようとしたのかを考察し、明らかにしていく。

〔報告者紹介〕 Thomas Barrett（トーマス・バレット）、1989年生。イギリス出身。専攻は清朝の歴史・思想史。愛知大学現代中国学部卒。現在東京大学大学院総合文化研究科修士課程在学。

◇ 牟宗三の「道徳的理想主義」における「道徳」

張 煒

〔報告要旨〕 牟宗三（1909-1995）は現代新儒家の代表者の一人として、「道徳的形而上学」と呼ばれる哲学体系を作り上げた。「道徳」を基本に据えたその体系に関して、すでに膨大な量の研究があるが、「道徳」という概念自体への注目は十分になされて来なかったように思われる。牟宗三ははじめから形而上学的な構想を行ったのではなく、むしろ50代になってから本格的にそれをはじめたのである。そこで、本報告では「道徳的形而上学」以前の牟宗三の「道徳」に関する論述に焦点を絞ることで、当時の「道徳」がどのような意味を持つのかを明らかにしたい。牟宗三は孟子から宋明理学へと続く流れに基づき、「道徳」概念を理解しているが、その理解は同時に強い現実批判の傾向を持つものであった。本報告ではこれらの点を整理する。

〔報告者紹介〕 張 煒（ちょう・い）。1983年生まれ。専門は中国思想史、特に現代新儒家。北京外国語大学日本語学部卒。現在は東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程に在学。論文「牟宗三と共産主義との距離：『実践論』『矛盾論』への批判を中心に」（『アジア地域文化研究』10、2013年）。

シンポジウム 東アジアの港市と海商

2015年7月12日(日) 10:00~17:00 1番大教室

企画の趣旨

国家単位で歴史を捉える見方は近年見直しが進んでいる。その一つとして海域という概念を設定し、国境を越えて動く人たちに関して研究する動きがあり、多くの成果をあげつつある。そこで、今年度のテーマは、海商・港市・移民というキーワードを設定して、東アジアにおけるその様相について議論してみたい。

第一部は、東シナ海の海商に関する報告とコメントからなる。西暦16世紀には、西洋の海商も参入して新たな動向が生じてグローバルな交易圏が成立したため、「近世」のはじまりと捉える見方もある。中国と日本それぞれの海商の実態についての報告を受けて、コメントでは文化史研究の立場から、それらをこの海域における変化としてどう位置づけることができるのかを論じる。

第二部は、南シナ海の港市とそこで活動する移民たちに関する報告とコメントからなる。海域交易にともなって港市に向けて人々の移動が生じ、そのままそこに定住する移民が新しい社会を形成していった。マレーとフィリピンについての事例報告を受けて、コメントでは近代の華南沿海の状況を紹介してそれらと比較する立場から論じる。

そして、総括討論では、これら個々の研究成果をふまえて、東アジア海域における港市と海商についてどのような歴史像が描けるか、議論を深めていきたい。

報告要旨

第一部 東シナ海の海商 10:00~12:15

徽州商人と倭寇——嘉靖後期の東アジア海域秩序の劇震を中心に——

熊 遠報 (早稲田大学)

1555年の夏には杭州に上陸した百人の「倭寇」が内陸に侵入して徽州にまで到達し、八十日、約二千キロを縦横無尽に進んで、軍・政要人を含む4、5千人を殺傷する大事件が発生した。また「倭寇」の頭目である許棟・王直・徐海らは徽州出身者であった。両者の関係は、当時の東アジア海域や社会変動を理解する糸口になると思われる。本報告では、両者の関係に注目し「嘉靖大倭寇」の背景や徽州出身者が「倭寇」の頭目になった理由について考察する。即ち①アメリカ銀の大量流入以前には「灰吹」技術による日本銀の増産及び高い商品生産能力をもつ中国の銀経済への転換が、銀需要と貿易活動の活発な展開を促していたこと、②徽州商人は早くから国際貿易に関わり、海域の貿易秩序の形成と再編に主導的役割を果たしていたこと、③明朝が海禁政策により徽州商人を「倭寇」としてしまったことを明らかにし、東アジア海域秩序に劇震を引き起こした「嘉靖大倭寇」は、早期グローバル化の一環として地域内部の要因によって起きたのであり、そのエネルギーは主に日本銀という国際貿易の便利な媒介の増産であったと結論づける。

16世紀のアジアの海が持つ歴史性は、「倭寇的状况」「せめぎあう海」などと呼ばれ、その混沌とした様子が強調されてきた。混沌の一因として、しばしば指摘されるのが、日本側の戦国争乱であろう。日本の政治的統制が弛緩し、放任状態にあったというものだ。

だが戦国期は一方で、地域権力としての戦国大名が成立してくる時代でもあった。大名は地域の公儀（公権力）として、領国内での私的な論理の発動に制限を加えていき、海賊行為を禁じ、漂着船の保護する動きが確認できるのである。また大名は、文書や旗などの通交アイテムを駆使することで、雑然とした諸勢力のなかから、正統な交易相手を選び分けようとしてもいる。

こうした戦国大名の動きは、海商をはじめとした交易者の性格にも影響を与えていく。本報告では、九州の島津氏の事例をもとに、戦国大名と海の交易者の関係について考えてみたい。

第二部 南シナ海の港市と移民 13:30~17:00

1760-1840 年代におけるマレー海域の貿易と移民

太田 淳 (広島大学)

18世紀後半よりマレー海域では、海岸部に居住し頻繁に移動しながら貿易や略奪を行う海洋移民が急増する。この現象は当時の中国で東南アジア産品（錫、胡椒、食用海産物、森林産物など）への需要が拡大しつつあったことに対応したものだったが、武力も備えた移民集団は、海上商業・軍事集団として移住先の政治秩序にも影響を及ぼすようになった。在地の国家は積極的にそうした移民を受け入れ、貿易促進を図りライバルとの抗争に利用した。1780年代からは地域の中核国家が衰退したこともあって、商業・軍事集団としての移民の役割はさらに高まった。中には政治的に自立するものも現れ、初期のオランダ植民地政庁が彼らに協力を要請し支配体制に取り込むこともあった。本報告では、そのような移民＝海上軍事・商業集団の活動に着目することにより、国家単位ではない地域の歴史を描き出すことを試みる。

交易と現地社会の再編—スルー王国における民族階層の構築

青山 和佳 (東京大学)

本報告では、東南アジア海域世界において15世紀後半までに成立し、18世紀半ばから19世紀半ばにかけて中国および植民地国家との海上交易で発展したスルー王国における民族階層構築について既存研究に基づいて紹介する。イスラーム王権国家としてのスルー王国における支配層はタウスグ人であった。この地域にはタウスグ語とは系統の異なるサマ語を話すサマ人が暮らしていたが、彼らはスルー王国の海上交易興隆とともに、陸サマ人と海サマ人に分化していった。この時期に地域的権力を得たのがイスラーム化していたサマ人が陸サマ人となり、政治的保護と引き換えに交易用海産物を貢納するという従属的地位に置かれたサマ人が海サマ人と言われている。後者はイスラーム化していなかったため、社会秩序の外に置かれることになった。この民族階層は、米国植民地統治に伴うスルー王国の衰退後も宗教・社会階層秩序として現地に残り、現代史の展開に影響を与えた。

〔シンポジウム報告者紹介〕

◇熊 遠報 (ゆう・えんぼう)

早稲田大学教授。専攻は16-20世紀中国社会経済史。主な論著に『清代徽州地域社会史研究』(汲古書院、2003年)、「清代民国時期における北京の水売買業と『水道路』」(『社会経済史学』第66巻第2号、2000年)、「18世紀における北京の景観と住民の日常生活」(東京大学『東洋文化研究所紀要』164冊、2013年)などがある。

◇黒嶋 敏 (くろしま・さとる)

東京大学史料編纂所助教、専攻は日本中世史。主な論著に『中世の権力と列島』(高志書院、2012年)、『海の武士団 水軍と海賊のあいだ』(講談社、2013年)、「琉球王家由緒と源為朝」(歴史学研究会編『歴史学の現在12 由緒の比較史』青木書店、2010年)、「室町幕府と南蛮—く足利の中華>の成立」(『青山史学』30号、2012年)などがある。

◇太田 淳 (おおた・あつし)

広島大学准教授。専攻は近代インドネシア史。主な論著に『近世東南アジア世界の変容—グローバル経済とジャワ島地域社会』(名古屋大学出版会、2014)、“Tropical Products Out, British Cotton In: Trade in the Dutch Outer Islands Ports, 1846-69,” *Southeast Asian Studies* 2-3 (2013): 499-526, “Pirates or Entrepreneurs? Migration and Trade of Sea People in Southwest Kalimantan, c. 1770-1820,” *Indonesia* 90 (2010): 67-96 などがある。

◇青山 和佳 (あおやま・わか)

東京大学准教授。開発経済学専攻を経て、現在の関心は島嶼部東南アジアの宗教と経済、調査対象はフィリピンの都市に暮らすサマ人、手法は民族誌。主な論著に、『貧困の民族誌—フィリピン・ダバオ市におけるサマの生活』(東京大学出版会、2006年)、共編著に『援助がつくる社会生活—現場からのプロジェクト診断』(大学教育出版、2010年)、などがある。